

## 8. 結論

専門研究 A「特別支援教育における ICF-CY の活用に関する研究—活用のための方法試案の実証と普及を中心に—」（以下、本研究）は、課題別研究「ICF 児童青年期バージョンの教育施策への活用に関する開発的研究（平成 18 年（2006 年）度～19 年（2007 年）度）」、そして専門研究 A「特別支援教育における ICF-CY の活用に関する実際的な研究（平成 20 年（2008 年）度～21 年（2009 年）度）」の流れを汲む研究でもあり、本報告書は、本研究の 2 年間だけでなく、一連の研究の 6 年間の総括でもあった。

本研究においては、特別支援学校の学習指導要領等の解説に示された「ICF の考え方」をベースにしながら、それを具体的に実践につなげていくための研究として、終了課題「特別支援教育における ICF-CY の活用に関する実際的な研究」で開発した活用を支える方法試案としての活用支援ツールについて実証し、より学校現場等で使いやすい、効果的なものに改善した上で普及を図ることを主な目的とした。また、併せてこれまで ICF/ICF-CY を活用してきた学校等における活用後の効果について検討するとともに、多職種間連携に活用した事例、児童生徒本人が活用する事例、幅広い障害種の事例を収集・分析し、活用の可能性についても検討することにした。

まず方法試案としての活用支援ツールについては、これまで述べてきたとおり、研究分担者や研究研修員、研究協力者による協議や、研修参加者等からの意見聴取、学校現場での実際の活用を通して実証し、それぞれの有効性について確認するとともにそれらに基づいてより活用しやすいものとして改善し、公表することができた。これまで ICF/ICF-CY を活用してきた学校における活用後の効果として、活用のあった学校における教職員へのインタビューを通して、各校固有の効果とともに、個別の教育支援計画策定が求められた共通した時代背景のもとで、学校内の様子のみにとどまらず、より幅広く子どもを捉えることが可能となった等の効果が確認された。そして、多職種間連携に活用した事例、児童生徒本人が活用する事例、幅広い障害種の事例について収集し、それぞれにおいて活用が可能であることが確認された。

これらを踏まえ、本研究で実証・改善に取り組んだ活用支援ツールは、学校現場等におけるそれぞれの目的に合わせた ICF/ICF-CY の活用に寄与し、子どもの捉え方の改善等の効果につながるものと期待される。また、本編に添えて掲載した各種資料もこれらの実践に寄与できるものとする。ぜひ、それぞれの目的に応じて積極的に活用されたい。

一方、成果の普及を重視した本研究においては、成果や資料等を積極的に公表し、特に Web サイト <http://www.nise.go.jp/cms/8,559,52,273.html> のコンテンツの充実を図り、「本研究で開発・実証した、ICF/ICF-CY 活用支援ツール」、「取組み紹介」、「ICF/ICF-CY 活用事例文献データベース」、「特別支援教育における ICF/ICF-CY について活用に関するよくある質問と答え」、「特別支援教育における ICF/ICF-CY 活

用に関する，学校現場の先生から具体的な質問と答え」，「特別支援学校における ICF 及び ICF-CY についての認知度，活用状況等に関する調査」，「関連リンク」等を掲載するとともに，随時更新することにより，成果や資料等にアクセスしやすいように工夫した。以下，その他の成果普及の実績を記す。

## 1. 学会発表等

- ・徳永亜希雄・小林幸子・田中浩二・大関毅・川口ときわ・二階堂悟・溝端英二・松村勘由・加福千佳子(2010). 日本特殊教育学会第 48 回大会ポスター発表. 「ICF-CY チェックリスト開発の試み—個々の「学習上又は生活上の困難」を把握するために—」
- ・徳永亜希雄・溝端英二・松村勘由・金子健・菊地一文(2010). 日本特殊教育学会第 49 回大会ポスター発表. 「特別支援教育における ICF/ICF-CY 活用の効果に関する研究—活用した学校の教職員へのグループインタビューの分析から—」
- ・徳永亜希雄 (2010). 日本特殊教育学会第 48 回大会準備委員会企画シンポジウム 1 「特別支援教育における ICF 活用の前提」での話題提供
- ・徳永亜希雄 (2010). 日本特殊教育学会第 48 回大会自主シンポジウム 33. 「ICF の学校現場への適応 VII-ICF 活用の実際・「子ども理解」で活用する」での指定討論者
- ・徳永亜希雄・松村勘由・金子健・菊地一文・溝端英二・二階堂悟・齊藤博之 (2011). 日本特殊教育学会第 49 回大会自主シンポジウム 36. 「特別支援教育における ICF/ICF-CY 活用を支える手立ての検討」の企画及び成果報告

## 2. 本研究所の研修での活用

- ・平成 22 年 (2010 年) 度及び 23 年 (2011 年) 度専門研修 (情緒障害・言語障害・発達障害教育コース. 視覚障害・聴覚障害教育コース及び知的障害・肢体不自由・病弱教育コース) 講義「特別支援教育における ICF の活用」
- ・専門研修員による「特別支援教育における ICF/ICF-CY の活用」に関する自主勉強会への資料提供

## 3. その他

- ・徳永亜希雄 (2010). 特別支援学校学習指導要領の解説に記載があった. ICF (国際生活機能分類) を指導にどう生かすか? (冊子: 新しい教育課程と学習活動 Q&A 特別支援教育 [知的障害教育])
- ・徳永亜希雄 (2010). 教育における ICF の活用 (冊子: 発達障害白書 2011 年度版)
- ・徳永亜希雄 (2011). 連載講座: 肢体不自由教育における ICF/ICF-CY の活用の実際 その 1 —学習指導要領等での記述と活用動向— (雑誌: 肢体不自由教育第 200 号)
- ・徳永亜希雄 (2011). 連載講座: 肢体不自由教育における ICF/ICF-CY の活用の実際 その 2 —実際の活用事例及び活用を支えるツール等の紹介 (雑誌: 肢体不自由教育第 201 号)
- ・国立特別支援教育総合研究所(2011). 活用 ICF 及 ICF-CY: 從嘗試到實踐 —以特殊教育為中心—. 華騰文化股份有限公司出版 (台灣). (2007 年 9 月に日本で発売した「ICF 及び ICF-CY の活用 試みから実践へ—特別支援教育を中心に—」の中国語

訳)

- ・静岡大学教育学部附属特別支援学校研究フォーラム.「特別支援教育における ICF の活用を考えるー静岡県内の取組を中心にー」の共同企画と成果報告 (2011.11)
- ・平成 23 年 (2011 年) 度国立特別支援教育総合研究所セミナー ポスター発表(2012.1)

以上のように、本研究の目的は、概ね達成できたと考えているが、「はじめに」で述べたとおり、本研究開始時には想定していなかった動きも見られ、その例として「特別支援教育の在り方に関する特別委員会合理的配慮等環境整備検討ワーキンググループ」による「合理的配慮」と ICF を関連づける言及等がある。本研究は、ここに閉じるが、これらへの対応を今後の課題の一つとして認識している。

(徳永亜希雄, 松村勘由, 金子健, 菊池一文)